

月騷調

江藤不二郎

雑音の潮が推し流され

太陽が夕焼の雲に澱れると

雨後の緑の葉の波に

洗はれ且浮ぶ教會の

十字架は光を吸ひ盡し

妾の心は影を失ひ

四方から紫の蝶が羽搏く

波が波を乗りこゐる海のやうに

讚美歌が緑の葉の上を泳いで来る

鐘の音が心の奥に作つた漣も消ゐた

寂寞の黒衣を胸につくらふ
はてしなく横はる祭壇の上に

白塗もはげ落ち

蔦の這ふ雨にびしよ濡れた倉の壁に

隣家からもれた光が

チヨロチヨロとたはむれてゐる

粉を散らして蛾は

ためらふ火影を求める

あゝ 今、雲を裂いた月光に

十字架は祈りつゞける

妾の心は影をとらへる

毒々しい粉を散らして

十字架に心は吸はれてゆく